

町の魅力をまず私たちが 学ぶことから始めたい

大山恵みの里づくりフォーラム



職人気質の大工さん、どきどきしながらあいさつしてくれる御来屋の学生、近所のおばあさん。故郷の人、食べ物の魅力をユーモアたっぷりに話す湊裕美子さん



パネルディスカッションの様子。

「今の旅行者が求めているのは、いわゆる観光地ではない。その土地の住民とのふれあい、そこでしか味わえない食べ物など体験型観光のニーズが増えている」「試食コーナーの町内産商品に知らないものがあつた。住民としてまず自分の住んでいる町の特産品を知ることが大切」など、大山恵みの里づくりへ向けての意見がかわされました



試食コーナー。地元の味を再発見しました

計画の理解と協力を

3月25日(日)、保健福祉センターなわで「大山恵みの里づくりフォーラム」が開かれ、約150人が参加しました。このフォーラムは、本年度から向こう3年間で取り組む「大山恵みの里づくり計画」を、町民のみなさんに理解してもらうことと、その実現に向けて力を合わせていくための機会として開いたものです。

故郷への思い

基調講演では、大山町出身で2年前から御来屋地区に住居を

構え、現在も東京や大阪を拠点に活躍中の演出家 湊裕美子さんが「故郷は・住んでいりゃこそ華なのよ!」と題してお話していただきました。

故郷である「御来屋」の魅力を替え歌で披露するなどユーモアあふれる話の中にも、わが町の水や空気、大山、日本海は町のかげがえのない財産であることに気づき、それらを「町民力」で守り続けていかなければならないといったメッセージを、満員の聴衆に熱っぽく語りかけていました。

計画実現へ向けて

後半のパネルディスカッションでは、湊さんを含む5人のパネリストにより、大山恵みの里づくり計画を実現するための具体的なアイデアや現在の取り組みについて意見交換がされました。

また、講演とパネルディスカッションの間には、大山ブランドをめざす町内産の商品20品目の紹介コーナーや試食コーナーが設けられ、出品者と参加者が一体化したフォーラムになりました。